

## ● 2005年度生理学会大会グループディナー「シナプトロジストの会」報告

第82回日本生理学会期間にあわせてグループディナー「第29回シナプトロジストの会」を下記のようにおこなった。

日時：2005年 5月19日（木）19：00～21：00

会場：仙台エクセルホテル東急（2F）オークルーム

話題提供：

柳川 右千夫 先生（群馬大学・大学院医学系研究科）

「生理学研究のための遺伝子改変動物の開発：GABAニューロンを蛍光分子で標識した遺伝子改変動物の作成と使用方法」

本会に出席した人は、60名を超え、そのうち約4分の1が学生・大学院生であった。柳川氏の講演は、遺伝子改変動物を生理学研究にいかに応用するかというテーマであったが、「遺伝子改変動物先にありき」で生理学研究がそれに付随するといういままでのベクトルを、「生理学研究のための遺伝子改変動物」というベクトルに180度転換する重要性が指摘された。このような動物の一つの系統からさまざまな生理学研究が触発され、シナプスを介する中枢神経ネットワーク機能の解明が飛躍的に進展することが期待される。また、柳川氏の「いろいろの分野で用いてほしい」というオープンさもあいまって、今後多くのラボで活用され、科学研究の底上げに貢献することだろう。引き続いておこなわれた懇親会においては、柳川氏の周りに人の絶えることがなかった。

乾杯に先立って、岩手大学名誉教授の佐藤誠先生から、「シナプトロジストの会」の由来についてお話いただいた。佐藤先生が本会の創始者であるということは知っていたが、そのいきさつをうかがったのは初めてだったので興味深く拝聴した。「シナプトロジスト」という名称は、20世紀前半のシェリントンの研究室に由来するとのことである。当時のシェリントンのラボには、そうそうたるメンバーが集まっていたが、大きく2つのグループがあり、それぞれ「アキソニアン Axonian」「シナプトロジスト Synaptolo-

gist」と自称し、研究のしるぎを削っていたとのことである。そして、それぞれのグループからHodgkin, Huxley, Katz, Ecclesらのノーベル賞受賞者が輩出した。佐藤先生が米国の留学を終えて帰国された時に（留学前後のエピソードを交えユーモアたっぷりに話されたが）、日本のシナプス研究からノーベル賞に値するものが現れることを推進したいという意図で、研究者の交流の場として、本グループディナーを創設されたとのことである。この話をうかがって、「シナプトロジスト」という耳慣れない言葉には、シナプス研究の本流たらんという自負が込められていることを知り、長年この会のメンバーであったことにいささかの誇りを覚えた。

科学研究は一種の文化であり、世代の積み重ねにより醸成されていくものである。「(国内の)研究からノーベル賞受賞者を輩出したい」というのは、個人の能力もさることながら、その背景にある研究の質および量的な厚みがあってはじめて実現することだろう。ノーベル賞だからどうのこうのというよりも、その背景にある研究の厚みこそが誇るに値するものとする。今後も、本グループディナーを通じて、研究者の交流を図り、創設の意図を推進していきたい。なお、次会（群馬大学）について、持田澄子氏（東京医大）に代表世話人をお願いし、抱負のご挨拶をいただいた。

今回は、初めての試みとして、グループディナーのホームページを立ち上げ、学会のホームページにリンクさせた。これが若手研究者の参加を掘り起こし、出席者の増加につながった要因の一つではないかと推測している。このようなホームページを少しずつ充実させていくことを通じて、グループディナーの外での研究者の交流を図っていきたい。末尾ではあるが、本会の会計事務を担当していただいた鹿野美紀氏に謝意を表するものである。

（文責：第29回シナプトロジストの会世話人 東北大院生命科学 八尾 寛）